

## 審査結果の要旨

### (1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究は音楽科における「創作指導」に関して現象学的な視点である「こと」と「もの」の関係性から創作行為を捉え直し、音楽授業における創作領域の指導の意義と意味を再考、再定義することを目的としている。現在、学習指導要領において「音楽づくり」と呼ばれている創作活動は、その実践が義務付けられているにも関わらず、教育現場で行われている割合は他の領域と比較して極めて低い。これは、創作をなぜ、何のために、どう教え、どう評価するのかという根本的な目的、方法、評価についての指導体系が未だ確立されているとはいえず、多くの指導者が創作指導を躊躇・忌避せざるを得ない状況にあることが考えられる。この状況を打開するために、申請者（著者）は音楽の創作を「自己に内在するイメージを目的として、音へと変化するような表現行為」ととらえるのではなく、〈試行錯誤〉によって「音や音楽と出会い、自己と音楽が「作り作られる関係を構築すること」であると捉え、音楽と自己の関係を根本的に問い直すことからこの問題に取り組んでいる。

音楽科の創作領域における指導理念について、音楽と音楽行為の原点から考察した研究はこれまでほとんどなく、本研究は問題意識やアプローチに独創性がみられるのみならず、これまでの音楽教育学において欠落していた領域をカバーする意義のある取り組みである。

### (2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文は、ラカンの「鏡像段階論」および木村敏の「時間論」をベースとした現象学的アプローチにより論を構築している。自己と音楽の関わり方、音楽をつくることの意味について掘り下げてくためには、哲学による考察は不可欠であり、研究方法として妥当であると言える。そこから作られた理論をカリキュラムに落としこみ、筆者自身の実践や公立中学校での授業観察によってその有効・有用性を確認しているのは、本大学院の設立主旨に沿うものであり、実践を志向した研究であるといえる。

### (3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

上記2人に著作に加え、ソシュール、アリストテレス、ヴァイツゼッカー、ヴィトゲンシュタイン、キュルケゴール、デリダ、ハイデgger、バルト、フッサール、ベルクソン、西田幾多郎、井筒俊彦、中村雄二郎、和辻哲郎をよく咀嚼し、チクセントミハイのフロー理論とエリオットのプラクシス音楽教育論を組み合わせ、練り上げた理論は説得力がある。以上より資料収集と分析の妥当性、適切さにおいて問題はない。

### (4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文の構成・展開は以下の通りである。

- ① 従来の我が国で行われてきた戦後から今日までの創作指導の実践を概観する（第1章）。
- ② 自己と音楽の関係について「時間」を軸にして論を展開する（第2章）。ラカンの鏡像段階論や木村敏の時間論を踏まえ、自己も音楽も時間の経過とともに蓄積される「もの」と現

在進行している「こと」との差異と反復によって存在が保証され、互いに「つくり作られる関係」であることを導き出した。

- ③ 音楽は言語やイメージと何が異なるのかについて考察する（第3章）。音楽は言語のように「シニフィエーシニフィアン」の表裏関係を持たないこと、イメージは空間的な「もの」であり、音楽は時間軸上の「こと」であることより、言語やイメージからは直接音楽をつくることには結びつかないことを論じている。
- ④ 音楽創作の意義と作品の関係について明らかにする（第4章）。音楽をつくることとは、音を紡ぐことで自分の知らない自分に出会うことであり、他者とのつながりを感じながら生きる喜びに浸ること、その実現には「試行錯誤」によって主体を満足させる音楽を現前させる技術が必要であると述べる。
- ⑤ 音楽づくりにおける「試行錯誤」の理論を提示する（第5章）。音楽創作における「試行錯誤」とはそれ自体が音楽行為であり、自己と音楽がまさに「つくりつくられる」生成現場であると述べる。
- ⑥ 創作のカリキュラムと指導法を提案する（第6章）。以上を踏まえ、「創作そのものの学びと喜びの学習」と「ソルフェージュ的な創作による〈試行錯誤〉の〈技術〉の学習」の二つを柱としてカリキュラムに落とし込むことを提案し、教員養成大学および神奈川県立中学校での実践によってその有用性、実効性を検証した。

結論として、音楽の創作においては、自身が音と関わりながら世界と向き合い、作る「こと」自体の喜びや幸福を得ることが重要であること、また全ての音楽教育の活動（演奏、鑑賞、作曲、即）は〈私の音〉を探す行為として〈音楽をつくること〉として一元的に捉えられることが導き出されている。以上の展開と結論は極めて妥当であり、学術的に高い水準にあると評価できる。

#### （5）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は、現象学的視点から論じた創作分野における我が国では最初の理論であるのみならず、音楽科教育そのものパラダイムシフトを引き起こす可能性のある労作である。難解なラカン、木村敏を元に緻密な論理構築から大胆な結論を導き出し、今後の我が国の音楽科教育にとって極めて重要な理論と位置付けられる。以上より、5名の審査委員は全員一致で、本学位論文が東京学芸大学連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位にふさわしいものと認め、合格であると判定した。